

# 松本正生先生の定年退職にあたって

経済学部長 禹 宗杭

松本正生先生は、法政大学大学院社会科学研究所博士課程を修了（政治学博士）されて後、1991年10月、本学教養部の専任講師として採用された。学部改組にともなって1995年に経済学部に配置換えされて以降、長きにわたり本学部の教育研究に専念された。同時に、高まる社会的ニーズを背景として、自治体や企業からの依頼に応じた社会調査・世論調査を行うことを目的に社会調査研究センター（以下、センターと略す）を立ち上げ、2013年10月からその長として奉職された。一方、学会活動等においても、日本行動計量学会運営委員（1995～2010年）、同学会編集委員（2008～2010年）を担うほか、埼玉県・埼玉大学共同政策研究「サイレントマジョリティの県政参加」研究主査（2002～2004年）を務めるなど、関連分野の発展に尽力された。

先生は、博士論文を基にした大作、『世論調査と政党支持—戦後政党支持構造史—』を世に問うて以降、世論の解釈と調査方法について探求され続けた。世論の解釈とかがわって、「支持政党」という伝統的な概念を乗り越え、「顕在的支持」と「潜在的支持」という新たな枠組みを示された。なお、その展開のうえで「支持政党なし」層を発見し、「支持政党を保有する通常の『政党支持者』とは人種が異なるという理由で、残りの部分に追いやってきた人たちが、いつの間にか多数を占めるようになり、政党や政治家は、その逆襲に遭遇している」（『政治意識図説』145頁）という立論をされた。それからやがて、投票行動が眼前の選挙限りで完結し、選挙そのものが短期的なイベントとして消費されるところの、「そのつど支持」という斬新な概念を提示されたのである。

一方、世論の調査方法とかがわって、被調査者が調査の質問をどのように受け止め、どのように反応するのかという視点が、多くの世論調査において欠落している点を常に意識された。そして、その欠落を埋めるべく、理論的な探求とともに実践的な模索を積み重ねられた。代表的には、従来の「他記式調査」に代わって、回答者自身の都合に合わせて調査対象者自らが答える「自記式調査」がより有効であることを主張された。この際、先生の関心が国政だけでなく自治体の営みまでをカバーしていることに留意しなければならない。すなわち、自治体の実施する意識調査は、社会のニーズを的確に把握し、その結果をフィードバックするコミュニケーション・ツールとしての役割を担っているゆえ、そのためにも自記式調査が求められると強調されたのである。なお、最近にいたっては、IVR（自動音声応答通話）で調査対象者のスマートフォンに接触し、Webアンケートへのアクセス方法を記載したSMS（ショートメッセージサービス）を送るような方式の月例調査をもテストされている。

先生の設立されたセンターは、このような先生の知見を研ぎ澄ませる場でもあり、その知見を社会に向けて広く伝播する場でもあった。現に、センターの年報の『政策と調査』は、2011年3月に創刊号が刊行されて以降、いままで19号を積み重ねてきた。先生は、その年報に、「18歳選挙権と『選挙ばなれ社会』—さいたま市高校生政治意識調査から—」「子どもから大人へ、政治意識と社会化環境—中学生・高校生・有権者調査—」「『不満もなく、関心もなく』、政治を意識しない若者たち—高校生政治意識調査（2016・17・19）から—」など多くの論考を寄せられた。タイトルからもわかるように、これ

らは若者の政治意識に対し深い関心を注いだものである。その関心のうえに立って、先生は、総務省・主権者教育の推進に関する有識者会議委員（2016～2017年）など公職においても大いに貢献された。

先生は、学部では主に「政治学」、博士前期課程では主に「政策形成プロセス論」、そして博士後期課程では主に「政策決定過程特論」をそれぞれ教えられた。先生の授業は基本的に、「政治社会の制度的な枠組みを、いくつかの関係性にレベル分けし、それらを類型化する諸理論を座標軸としながら、現代政治を理解していく」ものであった。それに魅せられ、多くの学部生・大学院生が先生の薫陶を受けたものである。

先生は、大学運営においても大きな足跡を残した。2003年に経済学部社会環境設計学科長になられた後、2004年から4年間経済学部の副学部長を務められた。引き続き4年間は本学の評議員として尽力され、なお2012年から2年間は本学の研究機構副機構長として活躍された。そして、前述したように2013年10月からはセンター長として長い間奉職された。このようにご多忙であったにもかかわらず、「おい、元気か」とよく声をかけていただいたことを、いまになってはとても懐かしく思い出す。これからも変わらず活躍され続けることを祈念してやまない。